

そういつたことも私は考えておりません。とにかく教育がいかに大事なものであるかということではしみじみと感じておりますが、この戦争の悲惨さを後世に伝えるのが我々年老いた者の務めだと思っております。

シベリア抑留記

鳥取県 森田 東明

はじめに

終戦から六十年近くたった今日、学業を六カ月繰り上げて卒業し、直ちに兵役に就き、その間、いくたびか生死の岐路に立ち、幸か不幸か生き延びて今日、この日本の繁栄を見ていること、誠に感無量なものがある。亡き戦友の分までもと働き続けて五十有余年、光陰矢のごとく、いつしか八十歳を越す年となった。

戦争を知らない我々の子孫に、二度と味合わせではならない、この貴重な体験を記録し、またソ連という国はいかなる国か？を永く後世に留めおくことは、我々生き残って帰還した者の責務であり、犠牲になった数多くの戦友達に報いる供養であると思うのである。しかし、われわれが歩んだ青春の体験を若い人の価値観で理解することは、

むずかしいかも知れないが、我々の育った歴史的
背景を理解し、戦時中の日本人の気持ちを知るこ
ととしかないだろうと、思っている。

よくよくソ連という国は、日ソ不可侵条約（昭
和十六（一九四一）年四月）昭和二十一年三月）
を一方的に破り、参戦わずか七日で戦勝国となっ
た。そして満州における日本が投資した施設、機
械はもちろんのこと、穀物に至るまで根こそぎ持
ち帰り、我々を欺して抑留させ、強制労働に駆り
立て、多くの同胞を犠牲にした。この恐るべき永
恨の爪跡について、帰国の際、運よく防寒外套の
裏に縫いつけて持ち帰ったメモ帳をたどりながら
その体験をまとめた。

シベリア抑留前後の記

昭和十九年十二月 初年兵の教育

半年間教官

関東軍直轄機動第一旅団

第二連帯へ転属（吉林市）

牡丹江省 黒山―黒營―狼溪

―豊燒地域

昭和二十年六月 き号演習

東満国境地帯

（労黒山を中心とする）（千五百人）

昭和二十年八月五日 急遽陣地を下山

” 八月七日 吉林の部隊へ帰る

” 八月九日未明 ソ連機が爆撃 日ソ開

戦

” 八月十日朝 出動命令

一日中出動準備（六百人）

八月十一日から公主嶺に

て旅団管下の将校集合教

育（暗号）

八月十一日	引込線から敦化へ出発	昭和二十年八月十六日	関東軍指令部戦争終結
八月十二日	敦化を通過し名月溝に到着	吉林へ撤退……命令	
八月十三日	旅団司令部：敦化市内 敦化市を中心に東方地区 から北方の鏡泊湖にかけ 約百キロの範囲に第一、 第三連隊が陣地を構築 我が第二連隊の尼崎中隊 他二カ中隊は、名月溝の 前方で天宝山北側山麓付 近に陣地を構築 延吉方面から進入予想の 敵戦車の攻撃に当たるこ とになった 夜を徹し、タコ壺、壕掘 り 爆雷（十キロ）、手投弾、 火炎瓶	八月十八日	吉林へ帰還 軍馬百数十頭については 貨車の都合がつかず二百 数十キロの行程を行軍に て帰る 指揮官……柿田少尉、命 ぜられる 途中満人達集落通過 日本惨敗に喝采を叫び爆 竹を鳴らして喜んでいる 吉林郊外に着く ソ連の機動部隊が到着 しており、警戒が厳重 で我が部隊に合流でき ず
		八月二十五日	満州電業KKの空社宅 未明突如満人の日本人

昭和二十年九月五日

財産掠奪襲撃に遭遇し、
三人の兵負傷する
命がけの防衛：乱射乱
撃

沙河沿飛行場へ辿り着く
吉林の兵舎へ帰ることな
く、着の身着のまま生死
の境を彷徨しながらお互
いに相助け、励ましての
行軍

〃 九月七日

東満各地域から残留部隊
集結
武装解除

〃 十月中旬

富永、赤鹿兵団長が随
行するなか、将校、下士官、
兵に区分し収容となる
完全に軍隊組織解体
各地で暴動と虐殺、
抗日運動の勝利に鏡泊湖、

〃 十二月三日

沸き返っていた
約一週間で東京城、牡丹
江を経て液河に徒歩行軍
(二百十キロ)

〃 十一月十五日

シベリアへ向かって出発
ソ連での持ち物検査
不良監視兵の品物強奪
(時計、万年筆、革製品)

一日停車、機関車を取
り替えた

衣類の蒸気消毒、入浴
駅の構内：女子の駅員
が多く、車両の点検、
油さし

里程表
ウラジオストック

：四、三〇〇キロ
モスクワ

昭和二十年十一月二十九日（北欧ロシア共和国）

：五、五〇〇キロ

タンボフ市のラーダ

ー第一八八收容所へ

着く

日本軍側総隊長：谷

参謀

第三大隊九二バラッ

ク長 北爪少佐

独ソ戦当時の急増バ

ラック兵舎

周囲四キロ近い広大

な森の中に屋根だけ

が地上に出ている洞

窟小屋（ゼムリヤン

カ）

シベリアの広大な大

地（大雪原）を

ノボシビルスク、オ

昭和二十一年四月十三日

ムスク

——ウラル山脈を越

える

ヨーロッパの黒土地

帯

——ボルガ河を渡る

死者多く出る

冬戦争：物凄い寒気

の襲来

栄養失調、発疹チフ

ス、

霊安所へ死体の山

病人キリザノフ保養所

へ転送

（親友、清水、原、小

国少尉も転送）

食糧：質量とも、極め

て悪く、一日黒パン三

〇〇グラム

それに、朝夕カーシャ
という燕麦の粥か、高

梁の粥が飯盒の蓋に七
分程度、時には、塩魚
か豆類の少量入ったス
ープ

砂糖、岩塩、少々であ
った

煙草：週に一回マホル
カという木屑のような
煙草

昭和二十一年六月上旬 タンボフ市の道路作業

昭和二十一年七月十九日 ラーダー収容所を出発

昭和二十一年七月二十三日 キヅネル駅着 モス

クワ東北七百キロ

(シベリア鉄道の支
線)

ここから八十キロ

三泊四日行軍

昭和二十一年七月二十八日

ヴォルガ河の支流ガ
マ河沿いの台地

エラブカ第七収容所
(タタール共和国カ
ザン地区)

A、Bラーゲリあり
高層の白い塔と寺院
がある

収容所は白塗煉瓦造
元将校専用の施設
九千五百人収容(関
東軍全部二万人将校
の半分)

昭和二十一年八月四日

Bラーゲリ編成完了

首席：三原大佐

経営大隊に編入される
(主な作業)

森林伐採、コルホーズの
農場作業、筏組み作業

ここを基地として奥地へ
数百人単位で作業に派遣
される

(ボルシヨイボル、クゼ
ルタウン、カザン等)

昭和二十一年九月中旬
ボルシヨイボルへ森林伐
採(二百五十人)

特掃班に編入される

収容所内の糞尿の処理を
専門で運搬する作業

班長……北村士守少佐
(広島県福山市出身)

ソ連側…大変好意的(何
かに配慮)

夏は荷車、冬はソリ
部屋も一般の者とは別、

食事も増配、監視も比較
的緩和

解放された気分で日々を

送る

ガマ河堤防近くに一日三
往復(十人一組)

収容所から約三キロ先
特掃班の班長 深沢大尉

昭和三十二年八月のはじめ
第三十四軍は朝鮮軍管区

から関東軍の指揮下に移
った。第三十四軍下の第

一三七師団の師団長 秋
山義兪中将(陸士二十期)

八月十七日、師団長はい
つもと変わらぬ様子で、

三原参謀長の報告を受け
た後、遥拝所で古式に則

って割腹自決された。そ
の時介錯の役を果たした

人である。

深沢大尉は師団の高級副官であった。純白の布で遺骨を胸に抱き棒持していた。

夏の夜、南京虫に攻め立てられ、毛布をかついで屋外の涼み台へ避難する。そこで、星空を仰ぎながら大尉は介錯の模様について真相を語った。その時はじめて彼の苦悩の深さを知った。毎朝毎夕、リュックから骨箱を取り出して拜んで素知らぬ顔をしていた。

帰国したら真っ先に京都の閣下のお宅を訪ねてご遺骨と辞世を奥様にお届けするつもりだと言って

いた。

何回も持品検査のたびに
取り上げられそうになり
胆を冷やした。それにし
ても長い抑留期間中守り
通した彼の心労は並大抵
のものではなかったろう。
彼の人柄を偲びながら深
い敬慕の念をこめて印象
深いものがある。

昭和二十二年七月一日

待望の日本からの来信
二五九通の内、我にも来
信あり

国際赤十字社の斡旋によ
り俘虜用往復はがき（ス
イス経由）の返書

昭和二十二年八月二十四日～二十五日

二十時頃 オーロラ（北極光）を見る

昭和二十二年十月四日 ダモイ情報

二十一年から十二月十日まで約三カ月間の作業であった。

作業道具……二人引きのノコと斧での作業

木を切り枝を落とし、二・五メ

ートルに切り、高さが一メートル

ル、長さが二・五メートルに積

む。それがノルマで二人の共同

作業であった。天候が悪く、気

温が氷点下三〇度以下になり、

吹雪でも来れば作業は思うよう

にならない。

ノルマが一〇〇%消化できず、食料の減じられ

ることしばしば、余りにも給与の悪さに抗議のため、

全員が一時サボタージュをした。この責任を

問われ、工藤大尉が隊員の責任を一人でとり刑務

所へ送られた。その後、彼はどのように苦役を科

せられたか不明である。

この三カ月間に、手、足、耳、鼻が凍傷になっ

て、切り捨てた人も数十人であった。

○収容所内での赤化運動について

昭和二十二年の春、しばらく帰国できそうになり頃、共産主義の理解者たちが自主的な形で学習を始めた。

収容所に「クロイツェル」という女性の政治部中尉が、上手な日本語でラーゲリを切り廻し、特務機関員、憲兵、警察官等、彼女が狙った者は、決して見逃すことなく片っ端から情報網により釣り上げた。

「日本新聞」……（ハバロフスク発行 日本人向け思想教育新聞）……民主化運動を盛り上げる

主な内容（天皇制の罵倒、財閥や地主らの搾取の実態、軍閥に対する批判）……共産主義の洗脳教育

「壁新聞」……赤軍政治部の勧めで新聞班が生まれる

毎夜、各棟にオルグで民族解放、民主化運動の洗脳教育の話あり。新聞班は赤軍は赤軍公認の衣をまもって登場し、共産主義への転向を呼びかけ

て歩き廻る。同調するアクチブ（日本人活動家）
呼応し、拍手をしない者は、反動分子として糾弾
され、運動はエスカレートする。掲示板の日本新
聞に日本の国体の悪口を書いた記事の批判めいた
話をした若い大尉（陸士出身）……朝の点呼時、
ソ連に連行される。
それからは、見ざる、聞かざる、言わざる主義
……何事もなく……御身大切にである。

終わりに

戦争というものは極めて悲惨な結果を残すもの
である。

平成の今日まで、満州の各地から戦争孤児が父
母や肉親を探しに日本へやって来ている。戦争の
傷あとは余りにも深く、余りにも悲しい。一日も
早く戦争のない平和な世界を訪れることを心から
祈ってやまないが、今なお、イラクや中近東の諸
国で戦火の消えないのは残念で悲しい限りである。
最後に、「異国の丘」や「岸壁の母」の歌を聞くと

びに、異国の地で、祖国の空に思いをはせつつ亡
くなられた戦友たちのご冥福を祈ってやみません。